

2023. 5. 14. 主日礼拝説教  
聖書：ルカによる福音書21章 7～19節  
『あなたにとっての証し』

本日の箇所は「終末の徴」という小標題が付けられています。直前の5-7節では「神殿の崩壊を予告する」と書かれていますし、直後の20-24節では「エルサレムの滅亡を予告する」と編集されているわけですから、いわゆる「終末」とは崩壊に始まり崩壊に終わる一連の事柄であることが当時の一般的な理解であったと推察されます。

このくだりを描くにあたり、ルカはマルコのように場所をオリーブ山や、聴衆を弟子たちだけに限定する「隠されたこと」として記さず、神殿と一般民衆、つまり、より開かれた「公」の情報として述べています。このような終末の表現の中でルカは一体何を描きたかったのでしょうか。

ルカはマルコにはない「大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる」(11)と記します。およそ世の終わりとはこのような破壊に充ち満ちた有り様であろうと当時の人々は感じ取っていたようです。天変地異といった自然現象、対処の仕様も皆目分からない数々の流行病、体力のないこどもたちから倒れて行くのに何も出来ない親たち等々…。これこそが世の終わりかと思まがうばかりの悲惨を、これでもかと言わんばかりに当時の人々は何度もそういった苦渋を繰り返し嘗め続けて来たことを思うのです。こういった破壊と暴力、病いと飢え。終末とはかくあるごとしと誰もが領いたに違いなかったことを思います。現代を生きるわたしたちとは異なり、死という奪いがかもともっと身近にあった時代だったということなのです。

しかし、ルカは9節で「世の終わりはすぐには来ない」と断言します。つまり、終末遅延を宣言したのです。

人々の危機感を煽る偽キリスト、続く様々な苦難…。これらはもちろん苦しみではあるが、決して終末ではないとルカは語るのです。初代教会の告白とは、人は絶望の中に死んでゆく存在ではないということなのです。ここに立ち返ることこそが信仰であり、且つ福音理解であるということです。

初代教会とはいのちを育み合う関係性の中にあつて人間理解を深めてゆきました。貧しく、小さく、弱い者に希望と愛を語り続けて来たのです。初代教会の主たる奉仕である介護の現実の中で、飢えや病のために今まさに召されようとしているその人に向かって、破壊や暴力、つまり「あなたの無能と怠惰ゆえにこの結果を招いた」などという酷い言葉で送ったりはしませんでした。そんな人間理解は持たなかったのです。そうではなく、その人に対して「あなたは望まれてこの世に生を受け、神に愛されて人生を全うした」と慰めつつ送り続けたのです。

この慰めは嘘なのかも知れません。しかし、わたしたちは率直さを抑えたやさしい言葉を嘘だと言い切る資格はありません。そういう言葉でどれだけ自分を取り戻させてもらっていることでしょうか。その言葉の持つ意外なやさしさで、わたしたちの心はいつも復活しているのではないのでしょうか。

イエスは語ります。この愛に立ち返ることが「あなたがたにとって証しをする機会」(13)であり、そこに生きる者は「しかし、あなたがたの髪の毛の一本も決してなくならない。」(18)し、「命をかり取る」(19)者として用いられてゆくのです。